

平成 17 年度新たに開発された品種

独立行政法人林木育種センター 育種部長 田 島 正 啓

平成 17 年度は、農林水産大臣から指示された中期目標を受けて、林木育種センターが実施している中期計画（平成 13～17）の最終年度です。これまで年度計画に基づいて都道府県と連携して新品種を開発してきましたが、今年度の開発品種数は 63 品種です。それらの概要は下記のとおりです。

関東育種基本区のヒノキに関しては、平成 15 年度に 20 年生の精英樹特性表を作成し公表しましたが、それらの中から根元曲がりや幹の通直性、ヤング率などの材質形質、あるいは雌雄花着花性などの特性を加味して、成長特性に特に優れた新品種を選定しました。九州育種基本区のスギに関しては、20 年生の複数箇所の次代検定林においてヤング率の調査を行い、成長特性などの評価を加味して、建築材として利用する場合に特に重要な形質であるヤング率が優れた新品種、成長特性に優れた新品種などを開発しました。スギやヒノキに比べて増殖や育苗に年数を要する北方樹種のトドマツでは 15 年生次代検定林の解析結果から、特に成長特性に優れた新品種を開発しました。

東北や日本海側地域ではマツノザイセンチュウの被害が深刻であり、抵抗性種苗が一日千秋の思いで待ち望まれています。その対応として、関係県と連携して「東北地方等マツノザイセンチュウ抵抗性育種事業」を進めていますが、今年度もアカマツとクロマツの抵抗性品種を開発しました。これにより、今中期計画期間中のマツノザイセンチュウ抵抗性品種の数はアカマツ 43 品種、クロマツ 8 品種となります。スギカミキリの被害に対しては昭和 60 年から関係県と連携して抵抗性育種事業を進めています。本抵抗性育種の場合は無被害個体の選抜・増殖、そして一定の大きさの木を用いた検定を行うため必然的に年数を要しますが、今年度も計画に基づいて新品種を開発しました。また、花粉症対策としてこれまで花粉の少ないスギ品種を開発してきましたが、それらの中で花粉アレルギーの原因物質であるアレルゲン、Cry J 1、Cry J 2 の含有量が極めて少ないスギ品種を開発しました。更に、ロウ生産用として果実生産量が多く果実の含ロウ率が高いハゼノキと、環境緑化用として外部形態あるいは針葉の色素が特異なトドマツとスギの新品種を開発しました。

これらの新品種に関する詳細については、本誌に掲載した各記事をご覧ください。

近年、木材生産は勿論ですが、それ以外に地球温暖化問題、花粉症問題、水土保持問題など森林に対する社会的要請が多様化してきています。都道府県と連携して新たに開発した新品種がこれらの問題解消に貢献出来ることを期待しています。

関東育種基本区における 成長等の優れたヒノキ新品種の開発

1. はじめに

林木育種センター（以下「当センター」という。）は、都道府県や森林管理局等の関係機関と連携して、精英樹の次代検定林を定期的に調査し、各精英樹の特性評価を進めています。今回、関東育種基本区において、「精英樹特性表」の評価値を基にヒノキの成長特性に優れた新品種 16 品種を開発しましたので概要を報告します。

2. 新品種開発の経過

関東育種基本区では、選抜されたヒノキ精英樹のうち、次代検定林における 20 年次データが得られた 223 家系の成長特性、通直性を育種区ごとに評価し、「ヒノキ精英樹特性表」を公表しています。これらの評価値を基に、20 年次の樹高、胸高直径の評価値が 4 以上と成長特性に優れ、かつ幹曲がり、根元曲がりの評価値が 3 以上と通直性が平均以上である家系を選定しました。これらのうち、16 家系を新品種の候補とすることが関係各県との間で確認され、本年 3 月に当センターの新品種開発委員会において「成長等の優れたヒノキ品種」として認定されました。



写真-1 開発されたヒノキ新品種（鬼泪4号）

3. 開発された新品種の特性とその活用

開発された新品種と対照とした在来品種との比較を、検定林の 20 年次調査結果を用いて行いました。中部山岳育種区では、新品種が在来品種を樹高で約 10% 上回っていました（図-1）。他の育種区における結果を合わせると、新品種は、在来品種を樹高で 6～10%、胸高直径で 8～15% 上回っており、幹曲がりや根元曲がりにおいても同等以上の特性を持つことがわかりました。

新品種は、成長形質に優れ、通直性も平均以上であることから、導入して採種園を改良し、優良種苗の生産に役立てることができます。また、既に新品種が植栽されている採種園では、新品種のクローンから球果を採取して確保した種子から養苗することで、優良な苗木を生産することができます。

関東育種基本区は、林業種苗法に基づく配布区域の定めにより、福島県の一部がヒノキの第 1 区に、それ以外の地域が第 2 区に区分されていますが、これら 16 品種は、第 2 区で選抜されていることから、生産された苗木は、関東育種基本区全域で造林することが可能です。今後、林業家等が林業経営目標に合った品種を選択することに役立ててもらうため、品種の特性や検定された場所等をわかりやすく記載した特性表を公表する予定です。

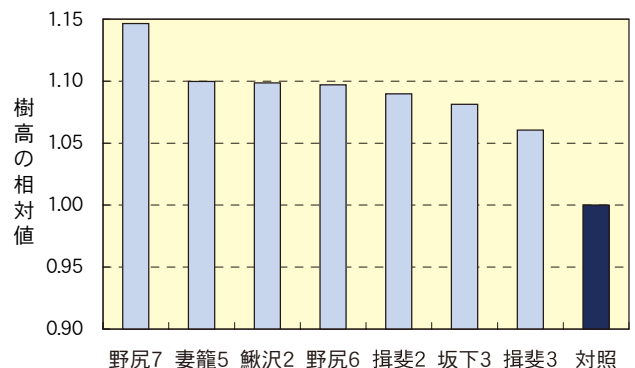


図-1 中部山岳育種区におけるヒノキ新品種と対照との樹高の比較（対照を 1 とした相対値で示した。）

（センター本所 育種課 久保田正裕）

北海道育種基本区における 成長の優れたトドマツ新品種の開発

1. はじめに

平成 17 年 3 月に北海道育種場が調査した、国有林の次代検定林 15 年次の評価に、北海道が公表した特性値を加えて「北海道育種基本区精英樹特性表」が作成されました。今回開発した成長の良い品種は、この特性表を基に道内どこでも成長が優良な家系を新品種として選択したものです。

2. 新品種の選定方法

選定には、国有林に設定した 21 箇所の次代検定林における 15 年次の調査結果の樹高、胸高直径及び生存率の家系平均値を使用しました。昭和 60 年の林木育種推進北海道地区協議会で決定した 9 箇所の種苗配布区域を基本に、北海道が設けた図-1 に示す道西南部、函館日高、道央部、道東部及び、根釧の 5 区域(以下「種苗配布区」という。)で検定回数が 3 箇所以上(ただし、根釧だけは 2 箇所)のデータに限定したところ、17 箇所の地域差検定林データを用いることになりました。各調査データから種苗配布区を単位として、どの検定林も同じ家系が植栽されているので、検定林単位に家系平均値を算出し、さらに、種苗配布区単位に家系平均を算出しました。種苗配布区ごとに偏差値を算出し 5 段階の評価としました。

この結果を基に、いずれかの種苗配布区で樹高及び胸高直径の評価が共に 5 若しくはどちらか一方が 5 で、他方が 4、かつ生存率が 3 以上の 18 家系を候補としました。その中から、どの種苗配布区でも樹高及び、胸高直径がともに 4 以上で生存率が 3 以上の家系をどの地域にも適応する家系として抽出しました。残りの中から、一つ以上の種苗配布区で樹高及び、胸高直径が 5 で生存率が 3 以上の家系若しくは複数の種苗配布区で樹高及び胸高直径が 4 以上で平均して成績の良い家系を精英樹の選抜地域のバランスも考慮して抽出し、表-1 に示す 8 家系をトドマツ新品種に選定しました。

表-2 推奨品種のクローンが植栽されている採種園 (○が該当)

採種園名	管理署	面積 (ha)	造成年	札幌 101 号	俄虫 109 号	大夕張 104 号	白老 1 号	大夕張 101 号	佐呂間 102 号	檜山 9 号	新得 117 号
銀山	石狩	3.64	S41	○		○	○				
築別	空知	8.73	S36	○		○	○	○			
新和	日高南部	5.68	S42	○		○	○	○			
美宇	日高南部	1.83	S43	○		○	○				
雨紛	上川中部	10.16	S37					○			○
塩狩	上川北部	14.52	S43	○							○
鷹泊	空知北支	3.49	S42	○		○		○			○
湧別	網走西部	6.50	S40						○		
岐阜	網走中部	5.59	S36						○		
明治	網走南部	5.50	S41						○		
陸別	十勝東部	4.93	S37								○
発足	後志	7.57	S37	○	○	○				○	

(北海道育種場 育種課 半田孝俊)

3. 新品種の入手法

新品種の苗を得るには、表-2 の採種園から母樹クローン別に球果を採取して種子を確保する必要があります。球果の採取は、採種園を管理している森林管理署に相談して下さい。

なお、当面の措置として、採種園の当該クローンに順次表示を行い、表示個体から優先的に球果を採取することにより、採種園産種子に占める新品種の割合を高め、育種の効果がより発揮されるようにします。また、既存の採種園を改良する際に導入クローンとして使用することにより、採種園の性能を高められます。

表-1 推奨品種とその評価

種苗配布区	道西南部						函館日高			道央部			道東部			根釧		
形　　質	樹高	直径	生存	樹高	直径	生存	樹高	直径	生存	樹高	直径	生存	樹高	直径	生存	樹高	直径	生存
札幌101号	4	5	4	5	5	3	4	4	4	4	4	3	5	5	3			
俄虫109号	5	5	3	5	5	4	3	2	4	5	5	3	5	5	2			
大夕張104号	4	4	3	3	3	3	5	5	5	4	4	2	3	3	1			
白老1号	4	4	3	4	3	3	5	4	4	5	5	4	5	5	3			
大夕張101号	5	5	4	4	4	2	5	4	4	4	4	4	5	5	5			
佐呂間102号	3	5	4	3	3	3	4	5	4	5	5	4	3	2	3			
檜山9号	4	4	3	5	5	3	3	3	3	4	5	5	4	4	2			
新得117号	3	3	4	5	4	4	4	4	2	4	4	3	4	4	4			



図-1 種苗配布区と検定林の位置 (●)



推奨品種
札幌 101 号

九州育種基本区における新品種の開発

1. はじめに

九州地方は、我が国の主要四島の中で最も南西に位置しており、温暖・多雨であるなど林木の生育に適した自然環境に恵まれていることなどから、古くから林業が盛んです。この地方では、人工林の大半がスギのさし木林分であり、このことが特徴となっています。また、これまでの長い歴史の中で、成長が早い、幹の形が良い、材色が良いなど色々な特徴を持った100種を超えるとも言われるさし木由来の「在来品種」を育んできました。さらには、そうした在来品種の特徴を活かした独特の林業経営を行う林業地帯を形成しており、林業者なら日田、小国、飫肥等の名前は必ず耳にしたことがあるはずです。

九州育種場（以下「当场」という。）では、このような九州地方の林業の特徴を考慮し、今回はスギについて成長・材質の優れた品種、成長の優れた品種及び材質の優れた品種を、関係機関の協力を得て開発しました。これらは、柱や板等の製材品への加工に適したスギ材の生産を念頭に置いて開発したものです。本品種は、さし木苗で利用することを前提としていますが、実生の母樹としても利用することができます。

一方、温暖な九州地方では、藩政時代より木ロウ生産を目的としたハゼノキの栽培が行われており、この地方における重要な特産品の一つになっています。このような歴史的背景もあって、ハゼノキの育種が進められてきました。その結果、果実の生産量が多く、しかも年ごとの豊凶差が小さいハゼノキ優良品種を2品種開発しました。

さらに、環境緑化用の品種として「屋久輝（やくひかり）」を開発しました。これは、当场が環境緑化樹として開発した「屋久翁（やくおきな）」を発展・改良させたものです。屋久翁は、成長が緩やかで枝の密度が高いという特徴を持っていますが、屋久輝は、この特徴に新葉の色が黄金色になるという色彩的な面白さを加えたものです。

このように、当场では九州の関係機関と協力して開発した当地方の特色に対応する3分野、19品

種の新品種を開発しましたので、それらの概要を紹介します。

2. 成長・材質の優れたスギ品種等

スギ材は、主に建築用の柱材や板材などの生産に用いられており、将来的にもこの傾向は続くと考えられます。しかし、「住宅の品質確保の促進等に関する法律」が施行されて以来、機械的等級区分などによる製材品の性能表示と、それを保証する品質管理の重要性が高まりました。さらには、より確実に性能を保証できる集成材、LVLなどの需要が高まり、スギ材もこれらの原材料として利用される場面が増加していくものと考えられています。このような背景から、これまでの目視による評価に代わり、ヤング率などによる合理的な木材性能の表示が求められるようになりました。

このような動きに対応したスギ品種を開発するために、より合理的かつ高い精度で材質を評価した品種の開発を目指しました。すなわち、当场では、関係機関の協力を得て、21箇所の検定林でヤング率を測定しました。このことによって、林分の違いによる変化を含めた、これまでよりも信頼性が高いヤング率の評価を行うことができました。ヤング率は、スギ材の材質表示で、特に重要な数値です。写真－1は、検定林から採取した供試材の材質を評価している様子です。また、材質評価を行った検定林を含め、70箇所の検定林の樹高データなどを解析し、20年生までの成長や通直性を評価しました。最終的に材質や成長、通直性などの



写真－1 ヤング率の測定風景

データを総合的に評価し、成長や材質に優れた候補クローンを選定しました。これらについて、関係機関で詳細な検討を加え、植栽環境によっては通直性が低下する可能性が指摘されたクローンを除外するなどした結果、最終的に成長・材質の優れた品種4クローン、成長の優れた品種5クローン及び材質の優れた品種7クローンを新品種として決定しました。

3. 木口ウ生産に適したハゼノキ優良品種

ハゼノキから採った^{はぜ}櫨^{じん}口ウは、粘靱性に優れるなど中国などから輸入される漆口ウには無い特徴があり、このことによって、化粧品や食料品からOA機器の生産に至るまで広く安定した需要があります。ハゼノキ栽培者、櫨口ウ生産者などからは、果実生産性などに優れた品種を開発して欲しいとの要望があり、これに対応し、広葉樹の育種や地域特性品種育成事業の一環としてハゼノキの育種を進めてきました。その結果、83クローンの優良品種候補木を選抜・収集し、これらによって試験地を設定し、果実生産量などの評価を進めました。また、DNA分析技術を導入して在来品種を優良品種と混同する危険性を除きました。

こうして集めたデータを検討し、5カ年間にわたる果実生産量の年次変動、すなわち、豊凶差について検討を加えた結果、毎年の果実生産が安定しており、しかも果実生産量と果実の含口ウ率が高い2クローンを優良品種として決定しました。写真-2にその一つを示します。これら2品種は、果実生産量と含口ウ率が一般的に栽培されている在来品種と同等かそれ以上であるだけでなく、毎年安定した収穫が得られるという点で在来品種よりも優れています。一方、口ウの品質を示す融



写真-2 ハゼノキ品種（水俣（育）1号）

点や粘度などについても、在来品種と同等か優れています。また、一房の果実数が多いなど、収穫作業が容易であることや若齢で収穫が可能になることなども注目すべき特性でしょう。

4. 環境緑化用スギ品種

当场が平成13年に公表した「屋久翁（やくおきな）」は、成長が緩やかで枝が密生することから、例えば、工場周辺の生け垣などの用途に適しています。さらに、外見的な面白さを加えることでこのような用途により適したものとするため、「屋久翁」と外見的に特徴のある品種との人工交配を進めました。その結果、「屋久翁」を母親にし、針葉がオウゴン色を呈する「日田ゴールド」を父親とした場合に、両者の特徴を併せ持つ子供を作ることができることがわかりました。そこで、両者の子供を「屋久輝（やくひかり）」と名付けて公表することにしました（写真-3）。この品種は、成長が普通の実生の1/5程度であり、枝や針葉の密度が高く、さらに、新葉は鮮やかなオウゴン色となるなどの視覚的な面白さがあります。

5. 新品種を利用させていただくために

九州地方の特性や需要に対応するため、関係機関が力を合わせて開発した新品種です。皆様に広く利用していただけるよう、当场では利用者の皆様と接することのできるあらゆる機会を通じて、これら新品種の利点を紹介させていただきます。



写真-3 環境緑化用スギ品種（屋久輝）

（九州育種場 育種課 藤澤義武）

東北育種基本区における スギカミキリ抵抗性品種の開発

1. スギカミキリ被害と抵抗性育種事業

スギカミキリは、スギ等の樹幹に侵入する穿孔性害虫として古くから本州各地のスギ林でその存在が知られています（写真－1）。材部に被害を受けたスギ立木は、商品価値が著しく低下するばかりでなく、場合によっては枯死するため問題となっています。



写真－1 スギカミキリ成虫と食害痕

東北育種場（以下「当场」という。）では、スギカミキリ被害への育種的対策として、東北育種基本区内の各県と連携し、昭和60年から「地域虫害抵抗性育種事業」の一環として、スギカミキリの被害に強い抵抗性品種の開発を進めています。

この事業では、既存のスギ精英樹等のほか、スギカミキリによる被害が80%以上の激害林から無被害木または微害木を選抜し、これらの樹幹にピン等の突起物を刺し、形成層を傷害することにより造られる傷害樹脂道の数进行调查（簡易検定）しました。この調査の結果、東北育種基本区内から、抵抗性候補木として533本を選抜しました。

2. スギカミキリ抵抗性品種の開発

当场では、場内に植栽された抵抗性候補木クローンに対し、孵化直前のスギカミキリ卵を樹皮に

密着させ、孵化した幼虫の材部への侵入経路を調査し、クローンの抵抗性を評価する卵接種検定を実施しています（写真－2、3）。



写真－2 スギカミキリ卵を樹皮に密着



写真－3 供試木の被害調査

今回は、当场奥羽増殖保存園構内で平成13、15及び16年度に調査した118クローンのうち、辺材部の食害が少ない10クローンを新たにスギカミキリ抵抗性品種として開発しました（一覧は巻末に掲載されています）。今回の新品種開発により、東北育種基本区内のスギカミキリ抵抗性品種は、既開発の10品種と合わせて20品種となりました。

（東北育種場 育種課 東原貴志）

関東育種基本区における アレルゲンの少ないスギ品種の開発

寒さが緩み、風が暖かく感じられるようになると、反射的に鼻がむずむずする人も少なくないでしょう。スギ花粉症は、国民病とも言える深刻なアレルギー疾患となっています。その一方、スギは木材として大変優れた樹種であるため、林業においてはスギの利用と花粉症の軽減の両立に向けた努力が続けられており、林木育種センター（以下「当センター」という。）ではその一環として「花粉の少ないスギ」品種を開発し、その普及を図ってきたところです。

スギ花粉症の原因物質（アレルゲン）は、花粉に含まれている2種類のタンパク質、Cry j 1とCry j 2であり、鼻や目に花粉が付着したときに、アレルゲンが花粉から溶け出して粘膜から吸収されることによって、くしゃみや鼻水といった症状が引き起こされます。したがって、空中に飛散するアレルゲン量を減少させることによって、花粉症を軽減することができると考えられます。スギ1個体のアレルゲン生産量は、花粉生産量×花粉中のアレルゲン含有量として計算することができます。これまでの研究で、花粉1g当たりのCry j 1及びCry j 2の含有量が品種間で大きく異なることがわかってきたことから、当センターでは花

粉生産量（雄花着生量）のみでなく、花粉中のアレルゲン含有量にも着目し、花粉生産量とアレルゲン含有量が共に少ない「アレルゲンの少ないスギ」品種を開発しました（表-1）。図-1及び2に、平成14年から平成17年の4年間の調査結果に基づく、アレルゲン含有量の品種間変異を示しました。精英樹全体、さらには「花粉の少ないスギ」品種の中にも、アレルゲン含有量が多い品種や少ない品種があることがわかります。146品種におけるCry j 1含有量とCry j 2含有量を合計した総アレルゲン含有量の平均値は、花粉1g当たり860 μ gであるのに対し、「アレルゲンの少ないスギ」品種では169 μ gと極めて少ないものでした。

したがって、この品種は、「花粉の少ないスギ」品種の中でも、特に花粉症対策に有効な品種であると言えます。今後は、東北、関西、九州の各育種基本区においても、主に「花粉の少ないスギ」品種を対象にアレルゲン含有量の調査を進める予定です。

表-1 「アレルゲンの少ないスギ」品種

育種区	品種名(精英樹名)	精英樹ID	選抜地
東海	天竜17号	1574	静岡県天竜市

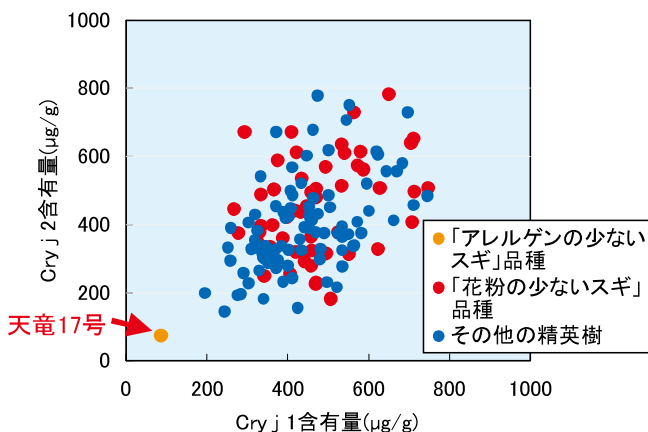


図-1 開発された品種のCry j 1含有量及びCry j 2含有量

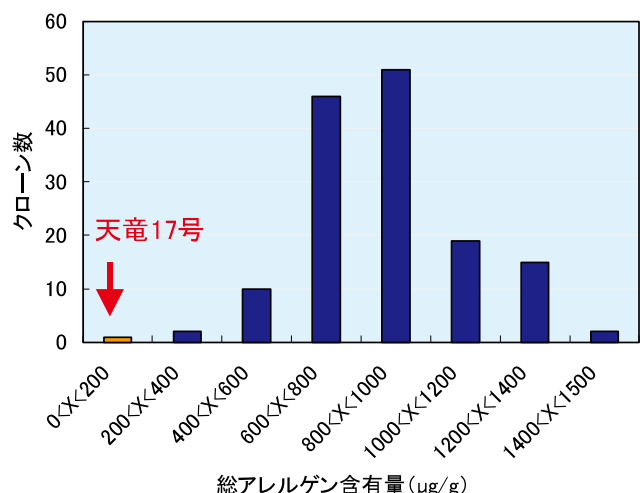


図-2 総アレルゲン含有量の品種間変異

(センター本所 育種課 福田陽子)

平成17年度に開発した新品種について

当センターでは、成長・材質の優れたスギ品種4品種、成長の優れたスギ品種5品種、材質の優れたスギ品種7品種、成長等の優れたヒノキ品種16品種、成長の優れたトドマツ品種8品種、アレルゲンの少ないスギ品種1品種、マツノザイセンチュウ抵抗性品種8品種（アカマツ6品種及びクロマツ2品種）、スギカミキリ抵抗性品種10品種、木ロウ生産に適したハゼノキ優良品種2品種、環境緑化用スギ品種1品種及び環境緑化用トドマツ品種1品種の合計63品種を平成17年度新たに開発しました。

○成長・材質の優れたスギ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
九州	1	福岡県 県八女12号	
	2	大分県 県竹田10号	
	3	大分県 県日田15号	
	4	宮崎県 県児湯2号	

○成長の優れたスギ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
九州	1	大分県 県大分5号	
	2	大分県 県佐伯13号	
	3	鹿児島県 県始良4号	
	4	鹿児島県 県始良20号	
	5	鹿児島県 県始良34号	

○材質の優れたスギ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
九州	1	佐賀県 県藤津16号	
	2	佐賀県 県藤津25号	
	3	佐賀県 県唐津7号	
	4	熊本県 水俣署5号	
	5	大分県 県臼杵7号	
	6	宮崎県 県東臼杵8号	
	7	宮崎県 日向署2号	

○成長等の優れたヒノキ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
関東	1	福島県 平2号	
	2	群馬県 高崎1号	
	3	千葉県 鬼沼4号	
	4	千葉県 札郷3号	
	5	山梨県 鯉沢2号	
	6	長野県 野尻6号	
	7	長野県 野尻7号	
	8	長野県 妻籠5号	
	9	岐阜県 坂下3号	
	10	岐阜県 揖斐2号	
	11	岐阜県 揖斐3号	
	12	静岡県 富士1号	
	13	静岡県 富士5号	
	14	静岡県 富士6号	
	15	静岡県 伊豆3号	
	16	愛知県 南設楽4号	

○成長の優れたトドマツ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
北海道	1	北海道 札幌101号	
	2	北海道 白老1号	
	3	北海道 大夕張101号	
	4	北海道 大夕張104号	
	5	北海道 俄虫109号	
	6	北海道 檜山9号	
	7	北海道 佐呂間102号	
	8	北海道 新得117号	

○アレルゲンの少ないスギ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
関東	1	静岡県 天竜17号	

○マツノザイセンチュウ抵抗性品種（アカマツ）

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
東北	1	岩手県	マツノザイセンチュウ抵抗性岩手(北上)アカマツ1号
	2	新潟県	マツノザイセンチュウ抵抗性新潟(上越)アカマツ28号
関東	3	福島県	マツノザイセンチュウ抵抗性福島(いわき)アカマツ8号
	4	福島県	マツノザイセンチュウ抵抗性福島(いわき)アカマツ23号
	5	福島県	マツノザイセンチュウ抵抗性福島(いわき)アカマツ26号
	6	福島県	マツノザイセンチュウ抵抗性福島(いわき)アカマツ32号

○マツノザイセンチュウ抵抗性品種（クロマツ）

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
関東	1	福島県	マツノザイセンチュウ抵抗性福島(小高)クロマツ37号
	2	福島県	マツノザイセンチュウ抵抗性福島(いわき)クロマツ27号

○スギカミキリ抵抗性品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
東北	1	秋田県	スギカミキリ抵抗性秋田県35号
	2	山形県	スギカミキリ抵抗性山形県7号
	3	山形県	スギカミキリ抵抗性山形県35号
	4	山形県	スギカミキリ抵抗性山形県47号
	5	山形県	スギカミキリ抵抗性山形県48号
	6	新潟県	スギカミキリ抵抗性新潟県6号
	7	新潟県	スギカミキリ抵抗性新潟県7号
	8	新潟県	スギカミキリ抵抗性新潟県8号
	9	新潟県	スギカミキリ抵抗性新潟県40号
	10	新潟県	スギカミキリ抵抗性前橋営6号

○木ロウ生産に適したハゼノキ優良品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
九州	1	熊本県	木部1号
	2	熊本県	水俣(育)1号

○環境緑化用スギ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
九州	1	熊本県	屋久輝(やくひかり)

○環境緑化用トドマツ品種

育種基本区	No.	選抜地	品 種 名
北海道	1	北海道	北林育2号